

東西思想の根底にあるもの

玉 城 康四郎

ご紹介にあずかりました玉城でございます。ちょうど10年前に研究室一同たくさんでこちらの方へお邪魔いたしました。さきほど栗原先生と車でだんだんこちらに近づくにつれて、当時おたずねしました風景がよみがえってまいりました。本当になつかしく思い出しているところでございます。「東西思想の根底にあるもの」という大変大きな題を与えられて、とまどっておりますのですが、書物にそういう名前をつけてしまいましたのでやむを得ないと思ひ、しばらくの間、ゆっくりとお話をさせていただきたいと思ひます。

私は仏教の方に縁がありまして、そちらの方を大学に入って学んでおったのですが、御承知の方も多いかと思ひますが、仏教はたくさんの学派・宗派に分かれておりまして、その学派・宗派相互の、お互いのものを較べましても、全くその体系なり内容なりが違っているのをごさいます。たとえば、仏教とキリスト教と比較致してみますと、キリスト教の場合には、大きくプロテスタントとカトリックと分かれておりますけれども、だいたいそれは制度

上の違いでありまして、宗教としての基本的なテーマは全く一貫しておるの
 であります。ところが仏教の場合には、その基本的なテーマが相互の各派に
 よりまして違っております。それをすべてこの仏教という一つの宗教の言葉
 でしめくくっておる、ということは、その宗派・学派を超えた、或は教義や
 組織を超えたところに仏教の本質があるのではないか。こういうふうな感じ
 を持ちはじめたのであります。ではその超えたところを学得していくのには
 どうしたらいいのかというのが次の問題になったのです。机に向って書物を
 ひろげて勉強しておりましたけれども、すぐに言葉につきあたって、言葉の
 理解はできても、その言葉を超えたところがなかなかむずかしい。これは机
 に向って書物をひろげておったのでは永久に不可能であろうという感じを持
 ったのであります。

そこで頭で理解し、心で感ずるという他に、体でもってうなずくことがで
 きたならば、体で憶えたならばもうそれは変わることはあるまい。心は昨日
 の心、今日の心、また今ちょっと前おなかがすいたという気持、それをご飯
 をちょうだいするとすぐみちて、又気持がこう変っていく。しかし体で憶え
 こんだならばもう変わることもあるまいと、まあそういうふうを考えまし
 て、そのためには仏教の開祖であります釈尊 Buddha の教えられました禅定
 でございますね。この禅定はむこうの言葉で、サンスクリット語では dhyā-
 na、パーリー語では jhāna と申しておるのですが、この禅定を学んで、禅
 定を実践していったならば、やがて体でそれを納得することが出来るであ
 るう。こういうふうを考えました。そこで Buddha の教えられている禅定は、
 そのままは伝わっておりませんので、坐禅、禅宗の坐禅を始めたのでありま
 す。これはなかなかむずかしいものでして、ご経験のある方はご承知と思
 いますが、じっとこすわりまして、そうして一所懸命、体・心を統一してい
 くのであります。これは後にこの書物の中にも書いておきましたように、全
 人格的思惟というふうに名付けてみたのでございます。その理由は、このサ
 ンスクリット語の dhyāna というのは、dhyai という動詞の語根からきて
 おり、「静かに考える」という意味でございまして、それが dhyāna という

名詞になっておりまして、これを静慮(じょうりょ)と、これは仏教読みで静
 慮と書いてじょうりょと読ませておるのでありますが、静かにおもんばか
 ると、こういう訳語もできておるのでございます。それがパーリー語、これは
 サンスクリット語の少しくずれた言語でございしますが、そのパーリー語の
 jhāna、これがインドから中央アジアを通過して中国に入つてまいります途中
 で、最後のこの a が脱落して jhān と、でこの jhān というのが中国に入
 って、禅という文字に訳されたのでありまして、中国の禅という言葉そのも
 のは別に意味はありません。音をとって訳したのであります。従いまして、禅
 とも言うし、どうも禅だけでは物足りないので、定という字を付け加えまし
 て、定^{じやう}というのはさだまる、体も心もじっと定まるということで禅定とも申
 しておるのであります。この禅定、あるいは禅と申しますのは、そういうぐ
 あいにやはり一つの考えるということでありまして、従って、私は全人格
 的思惟と名付けたのであります。

ところで私どもが考える、あるいは物を認識するという事は、自分と対
 象と相対して、いわば主観と客観と相対して、はじめてそこに認識が成立す
 るのでありまして、その代表的哲学者として有名なイマヌエル・カントが挙
 げられるのでございます。しかしカントをまつまでもなく、日常生活から学
 問的営みに至るまで、すべて主観と客観とが相対してはじめて成立するところ
 の認識、こういう“考える”という働きをやっておるのでありまして、そ
 れを对象的思惟というふうに名付けてみたのであります。これに對しまして
 全人格的思惟と申しますのは、頭で考えるのではなく、また心で感ずるので
 もなく、あるいは感情の働きというのでもなく、頭と心とあるいはもっとそ
 の奥に魂というものの存在を認めるといたしますと、その魂も、そうして大
 事なことは体そのもの、頭も心も魂も体も全人格体が一つになって営なま
 れるところの思惟というわけでありまして、これは頭で考えますといたしてい
 うことになるのか、見当違いになってしまいます。従いまして仏教で教え
 られておりますように、実際に坐禅を組んで、そうして実際にやってみては
 じめてその全人格的思惟、禅定というものがうなずかれてくるのでありま

す。

私は仏教を学びだしますやいなや、どうしても頭だけではいけないと感じました。さっそくその禅を始めたのであります。実際に禅と申しますのは禅宗の禅しかありませんので、その禅宗の老師についてこの実践を始めたのであります。なかなか思うようにまいりません。頭で考えるというくせが習慣づいておられますので、今申しますように全人格を一つにして営なむということがなかなかできにくいのであります。できるだけ努力をしておたのであります。そのうちに、いろいろ悩んで、苦しんで坐禅に専念しております時に、突如としてですね、突如としてこの全人格体が爆発したと申しましょうか、その当時はまだ原子爆弾というものはありませんでしたので、後で考えてみますとあれがその原子爆弾みたいなものじゃないかという気がいたすのであります。突如として爆発いたしました。そうして体も心も頭も、何と申しましょうか、吹きとんでしまいました。私は東京大学の図書館、夕方閲覧室で書物を見ておりました時に、突然その爆発が起こったのです。しばらく茫然自失しておたのであります。そうするうちにだんだんと意識が戻ってきました。意識が戻ってくるやいなや、あのもくもくとその歓喜、よろこびですね、歓びが腹の底から湧き起こって来たのであります。はあ、これが今まで自分が求めに求めておた目標が達成したのであろうかと、はじめて喜びにひたったのであります。禅宗でいう見性けんじょうというものであります。そうしてどういう具合にして家に戻ってきたのか、全く記憶がありません。

そういう喜びの状態が一週間、十日は続いたと思いますが、やがて一週間、十日するうちにだんだんさめてまいりました。とうとうあげくのはては、もとのもくあみに返ってしまったのであります。そうすると一体あれは何だったのであろう。単なる幻であったのか、夢を見ておたのか、いろいろ反省をしてみますけれども、決して幻ではなく夢でもなく確かに爆発が起ったという体験は疑いようもなかったのであります。しかしもとのもくあみに返って、全く以前の自分といっこう変わりがない。そこでまた悩みが新たに起ってまいりまして、もがき苦しんでおりますうちに、それから一月二月

たった頃にまた爆発が起こる。しかしもう前のような大爆発じゃなくて、小さな爆発でありますけれども、とにかくずっと何もかも悩みが消えていくわけであります。しかしやっぱりもとのもくあみへ結局はかえってくる。

こういうことを26歳の時から軍隊に入って戦争が終って20年余り、30年近く時々起こったり、またもとへ戻ったり、そういうことを性こりもなく繰り返して30年近くを過してきたのであります。60近くになりまして、仏陀の悟りの、あるいは目覚めの光景をうたった言葉に遭遇したのであります。それが「熱心に冥想しつつある修行者にダンマ (dhamma) が顕わになる時」一所懸命禅定に入っている修行者、修行者というのは仏陀自身、まだ仏陀にならないゴータマの時でございますが、そのゴータマ自身にダンマ (dhamma) が顕わになる時、「一切の疑惑が消滅する」と、これが仏陀の目覚めの原点である、その言葉に遭遇したのでございます。そこではじめて私の問題が解決したのでございます。

それはどういうことかと申しますと、禅宗では禅体験、宗教体験を見性けんじょうといひます。性を見るという、その禅体験であります。その禅体験、宗教体験そのものは、いいとか悪いとか判断の区別はないわけであります。これはもう体験そのものでありますので、是非、善悪の判断の入る余地はありません。ところがその体験をしている自分は、ああ私はもう体験したという気持がどうしても心の底から起こってくる。潜在意識から無意識へ掘り下げられ、はてしなく私の意識が掘り下げられている、その無意識のところ、あゝ自分は目覚めたところという気持がどうしても起こってくるのです。それは深い我執であって、もう体験ではなくなっているのです。それが問題なのです。お恥しいながら、体験と故の木阿弥こあみを性こりもなく繰り返かえして60近くになってやっと分ったのであります。

つまり体験とは、自分が悟った、自分が目覚めた、というのではない。そうではなく、その構造がまさにこのブッダの詩に明瞭に説かれているのでございます。ダンマというのは、全く形のない命の中の命、これは何と言葉を替えても間違ってしまうのでございますが、無理にあらわせば、全く形のな

い命の中の命、純粹生命とでも申しましょうか、それが私自身に顕わになってくると。私が、その命を悟るとか、獲得するとかいうこととは全く逆で、命そのものが顕わになってくる。こういうことにやっと気が付いたのでございます。先の見性ということで申しますと、見性、すなわち「性を見る」というのではなく、むしろ「性見」、性が見られる、という方が適切であると思えます。

しかしながら、それで問題がすべて解決したのではございません。その構造、仕組み、目覚めということの構造、仕組みが分ったのでありまして、私自身は依然として、もとのままの私でございます。しかしその仕組みが分ってまいりますと、その仕組みこそ私にとっては根本の教えになるのでありまして、その根本の教えに従って全人格的思惟、この禪定を安心して学んでいくことができるようになったのであります。そういう具合にしてだんだんこの実践を続けておりますうちに、禪宗の禪だけではなくて、禪宗の禪もつづいた一番原点の仏陀の教えている禪定、これが原始教典から大乘教典を学んでおりますうちに次第に諒解することができました。結局は一口に、一語にその教えをつづめてしまえば、今申しましたように、ダンマが私自身に顕わになり、そうして私に浸透し、ついには私自身を通徹していくと、こういうことに尽きると思うのであります。

このことを軸として、原始経典から大乘経典、それから経典を基にしたインド、中国、日本で展開いたしました各宗派、各学派の最も基本的な道筋がここにはっきりと言われている。こういうふうになぜかできたのであります。従いまして、安心してこのことを毎日毎日繰り返しておりますうちに、実はこの毎日毎日うまざたゆまざた時間を決めて繰り返すということが大切であります。毎日毎日同じことを繰り返すのであります。実はそれをやる度ごとに私の心とは全く質の違う新しい命、新生命、それに私自身が躍るのであります。「大学」という中国の古典の中に 湯の盤の銘に曰く「日に新たに、日に新たに、又日に新たなり」こういう言葉が見えておりますが、全くその通りでありまして、繰り返すその度ごとに私は新たにさせられ

てゆく。その形なき命に根本からリフレッシュされていく。従いまして食事は、日常の食事一度ぐらい欠いても、この食事だけは、これを禪食と言っておりますが、いろいろな食事が仏教にはございまして、この禪食だけは欠くことはできないと、まあこういうふうに決めましてやっておいたのであります。こういうふうに申し上げますと、いかにもはつらつとして生き生きとしているようにお感じになると思えますが、真にその通りでありまして、ところがこれを裏から見ますと、毎日毎日リフレッシュされていくということを裏から見ますと、人間の本性というものがいかに深く果しなく解決のつかないものであるかということの反証にもなってくると思うのであります。

だんだんこうしたことを続けておりますうちに、これは仏教の開祖のゴータマ・ブッダが教えられたその実践には違いないけれども、よく考えてみますと、仏陀は仏教という宗教をこの世に始めたのではない。仏教という宗派を創立したのではない。仏陀は、ただひたすらいかにして人間は生きとおしてゆくか、いかにしてこの現実を生きとおしてゆくかという、人間自体の根本課題を解決されたのでありまして、そうしてみますと、この目覚めの原型は仏教だけではあるまい。他のそれぞれの宗教の開祖、あるいは古代の哲人の中にも、おそらく同じことがあるであろうというふうに思ひまして、だんだんそれぞれの古典を調べてまいりますと、表現の仕方は違いますが、本質は同じことが古代ギリシャにも、あるいは中国の古典の中にも、あるいはキリスト教のイエスやパウロの中にも見えてきたのであります。

ここにいちいちその例を申し上げる時間がないので省略させていただきますが、いくつかの例をこの書物（『東西思想の根底にあるもの』）の中に書いてみたのであります。全く同じことがですね、古代ギリシャのヘラクレイトス、これは断片がいくつか残っております。或いはまたエンペドクレス、或はソクラテス、プラトン、更にずっとくだってキリスト教の開祖であるイエス・キリスト、そしてまたイエスを継いでキリスト教を確立しましたパウロ、ことにパウロの書簡は、相当の年配にまでパウロ自身が書簡を綴っておりますので、いっそうよく分るのですが、ことに『ローマ書』、『コリン

『前後書』のあちこちに同じことがみえるわけです。それは、ハギオン・ブネウマ *Ἅγιον Πνεῦμα*、聖なるブネウマ、日本語訳で聖霊、英訳では Holy Spirit となっております。ところがブネウマというのは、フーッという神の息吹きですね。パウロは目に見えない、形にあらわれていないこのブネウマによく留意せよと、言っておりますが、それを聖霊、あるいは Spirit と訳してしまいますと、どうも霊とか Spirit という観念にひきずり廻されて、本当の気持が伝わってこないようであります。神の息吹き、神の命、さきほど仏陀の言葉で申しますとダンマであります。全く形のない命の中の命。それから中国の古典にも同じことが見えるのであります。

こういう点から単にインド思想、仏教のみの独占物ではなくて、少なくとも古代、中世においては西洋にも又中国にも同様のことが、人間の根本課題として実践され、又実現されておったということに気付いたのであります。つまり対象的思惟と同時に、もう一つの人類に普遍的な思惟であります全人格的思惟は、対象的思惟とならんで人類に普遍的な思惟である。こういうふうなことが分ってきたのであります。全人格的思惟というのは、心も体もひっくるめた全人格体の一つになって営まれていく思惟であります。

その全人格体の一つになった所を、ブッダは業異熟 *kamma-vipāka* といっておられます。その根底は、はかり知れぬほど深いものでありまして、もう何と申しましょうか、あくたもくたのへどろの、あくたもくたのうず巻きが私の人格体の根底深く根付いておるのであります。ダンマが顕わになるといって、実はそのダンマは私自身の何とも表現のしようのないあくたもくたのへどろのうず巻きそのもの、即ち業異熟にこそダンマが顕わになってくるということにだんだんと気付いたのであります。その何とも表現のしようのないへどろの実態を仏陀は業異熟といわれるのですが、その意味は、過去の営み（業）が長い時間を経て、今ここに熟しているもの、ということでありまして、つまり、宿業の体、業体であり、私は人格的身体と名づけております。人格的身体といえ、いかにも何かきれいなようですが、全くそうじゃなくて、へどろもどろのうず巻です。この業異熟について、ブッダの説かれ

た経典をよく学んでみますと、業異熟というのは、無限の過去から生まれ変わり死に変わり、死に変わり生まれ変わり、しかも生きとし生けるもの、ありとあらゆるものと交わりつつ、生まれ変わり死に変わり、死に変わり生まれ変わり、輪廻転生して今ここに実現している私自身全体のエッセンス、というよりは、譬えていえば、キョッとつまんでだんごにしたような状態、しかもこのだんごが瞬間瞬間に明日を作り、時代を形成していくのでございますが、今ここに永遠の時間、永遠の空間の中にはつきりとうち出されている私自身の根源体、それが業異熟であり、業体であり、人格的身体であります。

それは私自身の根源体であると同時に、生きとし生けるもの、ありとあらゆるものとも、しかも天体も含めて、ありとあらゆるものとの交わりの中でここに実現しておるものでありますから、私自身の根源体であると同時に、宇宙共同体の結節点である。宇宙共同体の結び目である。そうすると、自分だけの解脱、自分だけの悟りということはありません。自分だけの目覚めではなくて、目覚めに少しでも心したものは、同時に一切はつながりあっておるものでありますから、そこが原点となって、それぞれ与えられているところのつとめをこの共同体の中でつくしつつ、皆共に目覚めてゆくことが、私どもにとっては真実の生き方であるということを思うのであります。このことを仏陀ははつきりと示しておられると同時に、決して仏陀だけの教えではなくて、他の宗教、他の思想にも通ずるものがあると思うのであります。しかもそこには、仏教の気付かなかった、仏教にはない多くの道や教えが説かれているのであり、従いまして互にふくみ合い交わり合いつつ人生の根本道を果しなく歩み続けてゆくことが、人間の真実の願いであらうと思うのであります。

私は、以上お話ししてきたようなことを感じているのであります。この思いをよくふりかえりてみますと、私自身の力はまったくなかったことを痛感するのであります。「積善の家に余慶あり」という言葉がございます。善を積んだ先祖の子孫には残りものの幸いがあるという意味であります。私の

先祖が善を積んだかどうかは知りませんが、私に恵まれてきた幸いというのは、何ともそういう気がしてなりません。思わぬ残りものの福がふりかかったという感じでございます。しかし、さらによく考えてみますと、先祖としては、私に父、母があり、その父、母にはまた父、母があり、こうして何代かさかのぼっていきますと、数千、数万の父、母となり、さらにさかのぼれば数千万、数億の父、母となり、もはや何々家の先祖などとはいっておられません。「一切衆生はことごとく父母兄弟なり」ともいわれております。そうすると、「余慶あり」ということは、一切衆生からの恩恵ということになりましょう。

さて、話しが変わりますが、最近アメリカのコーネル大学の惑星研究所長をしておりますカール・セーガンという科学者が、朝日新聞社から『コスモス』上下2巻をすでに邦訳されて出版しておりますので、ご存知の方も多いかと思うのですが、そのカール・セーガンがこの書物のはじめの所で、宇宙カレンダーを紹介しております。おそらくこれは現代科学の宇宙観の一つを代表しておるものと思います。いわゆるビッグバンに始まって今日に至るまでの時間を1年12か月の中に圧縮いたしまして、宇宙カレンダーを造っております。それによりますと、1月の最初にビッグバンが起こりまして、2月に最初の恒星と銀河ができて、3月に銀河の形成が進行して、4月に私どもの銀河系ができはじめ、5月に銀河系の中の最初の恒星が誕生し、6月に超新星の爆発が起り、7月にその超新星から新しい星が生まれ、8月にもっと多くの恒星が生まれ、太陽系ができはじめて、9月に太陽系ができて、地球と月ができて生命が芽生え、10月に藻が発生し、初期の大気ができて、11月に大気の中の酸素がふえて、月が地球から遠ざかり、12月に入ります。今日は12月の2日ですね。18日に三葉虫が栄える、そういう化石が残っているそうで、19日に最初の魚が登場して、20日、21日にそれぞれ植物と動物が陸に上りはじめ、23日に最初の爬虫類が誕生する。おそらく今から数億年前になります。26日に最初の哺乳類、これは数千万年前と言われております。そうして31日、大晦日ですね、31日の午後10時30分にはじめて最初

の人間があらわれた。どういう計算でこういうことが宇宙カレンダーとして言えるのか、科学者でない私にはわかりませんが、カール・セーガンという卓越した科学者の宇宙カレンダーですので、さもありませんと思うのであります。

つまり人間の知恵とか分別とか、意識があるとかないとか、嬉しいとか悲しいとか、そういうことを全部ひっくるめて、この私自身、皆さんの一人ひとりを裏付けているこの廣大無辺の無意識の大領土ですね。フロイドやユングのいうちっぽけな無意識ではありません。廣大無辺の大無意識界に思い至さずにはおられないのであります。この現実のどんな重大事件も、また日常のどんなちっぽけな事柄でも、さらに私自身、みなさんの一人ひとりも、確実にこの大宇宙から生れ、この大宇宙で養われ、そして大宇宙に帰っていくのであります。この疑いようもない事実を改めて思い直して見るのであります。

ところで4世紀から5世紀のころに成立したと言われております古代インドの書物に『俱舎論』という書物があります。この『俱舎論』の中に宇宙観を述べております。当時のインドで言われておった宇宙観をたまたま仏教に取り入れたものであらうと思います。それは成・住・壊・空の四劫であります。成というのが宇宙のはじまりです。まず天体ができて、生命があらわれる。生きとし生けるものがあらわれてくる。それが成劫ですね。宇宙がはじまって生物が成立しおわるまでを成劫。成立し終ると一応それが安定いたします。安定するといってもその中でいろんな変化は起ります。諸行無常ですから。しかし一応安定する時期がございます。それを住劫といいます。安定の時期が終ると、こんどはやがて壊れはじめる。それが壊劫。これも生命あるものから壊れてだんだんと天体に及んで、ついに何もかもなくなってしまふ、空々漠々の大虚空ですね。それが空劫なんです。成・住・壊・空はそれぞれ二十中劫と言われておりますので、もう途方もない長時間をそれぞれ経過します。そして空劫になってしまうとそれで終るのかというと、又途方もない時間がたってまた成劫がはじまる。つまり次の宇宙がはじまるわけで

す。それを繰り返していくわけでありませぬ。

その宇宙のはじまる時の状況が原典には次のように示されています。「衆生の業の増上力によって虚空にそよ風が次第に吹きながれる」(sattvānām karmādhipatyena ākāśe manda-mandā vāyavaḥ syandante.)「衆生の業の増上力」とありますが、衆生はまだそこには現れていないんですね。空空漠々ですから衆生はないわけです。そうするとこれは前の宇宙の衆生の業の助成する力なんですね。話が大きいでしょう。前の宇宙の衆生なんです。その前の宇宙の衆生の業力ごうりきですね。増上力というのは助成する力です。業力というのは、潜勢力 potential energy です。目に見えない形で残存している力です。それが時期を得ると次の宇宙のはじまりになる。どういう状況ではじまるかという、この大虚空にそよ風が次第に吹きながれる、というのであります。一陣のそよ風がスーッと吹き始める。それが宇宙開闢かいびやくの光景であります。その一陣のそよ風からやがて天体ができて、そうして生命が現われて、だんだんと時間を経てこのように私どもが今現われておるわけです。従いまして、今ここでこうして語り合っているこの現実をズーッともとへ戻してみると、一陣のそよ風におさまってしまう。笑いも涙も一陣のそよ風に帰する。まことにロマンチックですね。現代科学ではビッグバンと言っております。宇宙という廣大無辺な視点に立ってみれば、ビッグバンと言おうが一陣のそよ風と言おうが、大して違いはないのでしょう。

ところで仏陀に教えてもらった全人格的思惟を繰り返していくうちに、ついにこの一陣のそよ風にふれていく。これはほらを吹いているのではございません。当然そうなるのです。頭も心も体も、一つになって営むのですから。そうでない対象的認識、つまり日常の意識から言えば、皆さんは皆さん、私は私、机は机というふうに分断されてしまっておりますね。ところが知恵も分別も感情も意志も全部と一つになってしまえば、自然にそれは宇宙につながっていく。宇宙につながっておれば当然その原点にまで遡ってそこに触れるわけです。呼吸、或はプネウマということについて、イエスもパウロもそして仏陀も説いております。仏陀はかつて呼吸の調整ということ

を最高の弟子達に向かって、最高の教えであると言って、この簡潔無類の呼吸調整の教えを説法しておられる。誰でも呼吸している、生きとし生けるもの、誰でも生理現象としての呼吸をしている、その呼吸を訓練していくことによって、ただそれだけで、解脱に達するということを説いておられます。さきほどのキリスト教のプネウマと同じことです。

かくして全人格的思惟を営んでいくうちに、その原点のそよ風、宇宙の呼吸につながってゆくのであります。もはや物に心が優越するとか、どうしても心を大事にしなくちゃならんとか、そんなちっぽけなことではございません。この宇宙、宇宙そのものの原点につながりつつ、我々人類は未来に向けて歩みを起こしていかなくちゃならない。その原点につながってこそ、また人間自体のどうしようもないあくたもくた、へどろですね、それが本当に気付かれてくる。自然に頭こゝろがたれてくる、ああおれはもう目覚めたというんじゃないくて、自然に頭がたれてくる、稲穂が稔ると穂が自から下る、それと同じように、私の心の頭が自然にたれてくる。その宇宙の大道に気付いて進んでいかなくちゃならないと思います。人間のあくたもくたの、あらゆる人間のそうしたものがはき出されてくる場は我々の共同体である。ついに政治の問題である。政治と宗教という、簡単なことじゃなくて、この生きとし生けるものの共同体、それを管理、司さどるものは政治である。政治の舞台が本当に救われていくことこそ、私どもが将来への人間の道を熟慮していかなければならない課題であると存じます。時間を超過致しましたが、ゆっくりとお話してきまして大変ありがたく思います。ご静聴どうもありがとうございます。

The Basis of Eastern and Western Thought

Koshiro Tamaki

The basis of Buddhism can be said to be dhamma, which is revealed through meditation (dhyāna). Dhamma is the “life of lives” or “pure life”. Kenshō in Zen Buddhism does not mean to acquire dhamma. It means that dhamma is revealed in itself. The meditation (dhyāna) is the core of the whole of Buddhism. Through the meditation, dhamma reveals itself in the meditator and penetrates him. Through practicing meditation every day, the life of meditator will be refreshed day by day.

Buddha solved a fundamental problem of how man should live, through the awakening in which dhamma was revealed in himself. The same kind of awakening was experienced by the founders of various religions and the ancient philosophers. For example, in the Epistle of Paul, we can find the word “*Ἅγιον Πνεῦμα*”. This word means the breath of God or the life of God, which is equivalent to dhamma of Buddhism. Thus, meditation is universal.

According to Buddhism, dhamma is revealed in kamma-vipāka—what is ripened through the accumulation of past actions (kamma). This kamma-vipāka is one’s essence as well as the knot of cosmic community.

The cosmology of Buddhism is described in the Abhidharmako’s-abhāsyā. According to it, the universe is created for an extremely long time, and then gradually it will be destroyed and there will be nothing. But, after another inconceivably long time, a wind will blow in the empty space, and the universe will be created again. This wind originates from the potential energy of all sentient beings of the previous universe. The breathing controlled through meditation has a connection with the wind at the beginning of the universe. Connecting with the breathing of the universe or the origin of the universe by means of meditation, we should proceed to our future.